

## 第四章 三羽の小鳥

未明に基地を飛び立ったイスラエル空軍のF16I戦闘機3機はアラビア半島の付け根を横断し、サウジアラビアとイラクの国境線上空を飛行しつつあった。東の空が白み眼下のネゲブ砂漠に陽光がさし始めた。砂漠の起伏が波のような影を作り、その影と赤茶けた砂礫が黒と赤の絶妙のコントラストを描いている。何万年いや何百万年昔からの変わらぬ光景だ。ヨーロッパとドバイを結ぶ民間定期便のパイロットにとっては見慣れた風景であるが、今回のミッションに赴く若きパイロットは感動的な面持ちで眼下の風景を眺めていた。雲ひとつない真青な空と乾燥し切った砂漠の狭間を三羽の小鳥たちはひたすら東に向かって飛翔を続けた。

イスラエル空軍選り抜きの3人。彼らは肌の色も父祖の出身地も、さらにパイロットになるまでの経緯も対照的と言えるほどに異なっている。それでも彼らは「祖国イスラエル」を守ると言う気概に燃え固い絆で結ばれていた。彼らはお互いをニックネームで呼び合っている。3人のリーダー役で雁行飛行の先頭を飛ぶのは『エリート』。右翼後方の二番手が『マフィア』。そして左翼後方三番手のパイロットが『アブダラー』である。

第4章 普通のイスラエル人であればこれらのニックネームを聞いただけで本人の出身がすぐにわかる。『エリート』はアシケナジムの出身である。アシケナジムとは元々

ドイツに住んでいたユダヤ人のことであるが、彼の祖父とその兄弟たちを含め多くのアシケナジムはナチスのユダヤ人狩りで強制収容所に送られ、ホロコースト(大虐殺)で亡くなっている。彼の父親も収容所でガス室に送り込まれる運命であったが、寸前に戦争が終結し強制収容所から救出された。まだ若かった父はユダヤ人の祖国建設を目指すシオニズム運動に身を投じイスラエルに移住、そこで同じアシケナジムの女性と結婚して生まれたのが『エリート』である。

雑多な人種、国籍の移住者で構成されているイスラエルでは建国の中心となったアシケナジムはエリートである。とりわけ『エリート』の一家はWASPと呼ばれる飛びきりの上層階級である。普通WASPと言えば米国東海岸のエスタブリッシュメントの代名詞「ホワイト(W)・アングロ(A)サクソン(S)・プロテスタント(P)」のことであるが、ここイスラエルでは「ホワイト(W)・アシケナジム(A)・サブラ(S)・プロテクシア(P)」の略称である。サブラとはイスラエル建国のために最初に移住した人たちのことであり、いわばメイフラワー号で米国に上陸した移民家族のようなものである。そしてプロテクシアとは人脈があることを意味する。仲間から『エリート』と呼ばれるのは、彼がこのような華麗な血脈と人脈をバックにしているためである。

第4章 『マフィア』はロシア正教を信じるウクライナ地方の貧しい農民の息子である。彼が生まれた当時はまだソ連邦の時代であり、社会主義国家のソ連はキリスト教、ユダヤ教を問わず宗教を敵視し教会を否定した。集団農場制度により農民はロシア時代の

農奴制から解放され、コルホーズは労働者の天国になる、とモスクワ中央政府は宣伝した。しかし農民の暮らしは楽になるところかノルマに追われる生活が続いた。支配者がかつての地主から中央政府の高級官僚に替わっただけだった。それでも農民たちはいつか救われると信じて自宅や集会所でひっそりとキリストのイコンに祈りを捧げていたのである。

1985年にソ連でペレストロイカが起こると、帰還法に触発されてソ連から100万人とも言われる大量の移民がイスラエルに流れ込んだ。帰還法とは祖父父母のうち少なくとも一人がユダヤ人ならば誰でも移住できるといふものである。母親の実家の祖母がユダヤ人であったことを思い出した『マフィア』一家は当時5歳の息子を連れて新天地を目指した。中には役人を買収して祖父父母がユダヤ人であったと言う偽の証明書を手に入れイスラエルに移住した者も少なからずいた。

ロシアからの移住者と言えば医者か農民のどちらかと言われ、おかげでイスラエルの一人当たりの医者の数は世界一となったほどであるが、医者達は病院の勤務医か開業医となってユダヤ人社会に溶け込んでいった。しかし農地を耕すことしか知らない農民達は政府の与えた入植地で肩を寄せ合って暮らす他なく、『マフィア』一家が移住した開拓地は同じ境遇のロシア人ばかりであった。彼らのコミュニケーションではロシア言語が使われ、そしてキリストに祈りを捧げた。政府はヘブライ語を半ば強制的に奨励したが、『マフィア』の父親たちの世代は新しい言語を覚えるには遅すぎたのである。

## 第4章

イスラエル社会ではヘブライ語を話せないキリスト教徒のロシア移民たちは冷遇され、二級市民の扱いであった。建前では移住者の出身地、宗教、学歴で差別されないことになっているが、それはあくまで建前である。幼い時は皮膚の色や親の職業など意識することなく小学校で仲良く遊んでいた『マフィア』も大きくなるに従い嫌でも差別を意識するようになった。そのハンデイを乗り越えるために『マフィア』は学校では人一倍ヘブライ語を勉強し、優秀な成績を修めた。そして差別が少ない軍隊に入ったと言う訳である。

3機編隊のしんがりを務める『アブダラー』は地元生まれのアラブ人遊牧民ベドウインの子供である。彼らはオスマントルコ帝国の時代から現在の地に住み続けていた。第一次大戦後のイギリスによる信託統治時代に当たり一帯はユダヤ人に割り当てられ、アラブ人にはヨルダン川西岸が「パレスチナ」として割り当てられた。第三次中東戦争でイスラエルがパレスチナ地区を占領した結果、大量の難民が生まれたが、もともとイスラエル地域に住んでいた『アブダラー』たちはそのまま住み続けることができた。彼らはアシケケナージたちよりも古い先住民族なのである。イスラエルでは彼ら先住民の他エチオピアなどアラブ・イスラム圏から移住したアラブ人達をミズラフイムと呼んでいる。

ミズラフイムもロシア移住者と同様二級市民として扱われたが、実質的にはロシア

の移住者以下の扱いであった。イスラエル国内でイスラム過激派の自爆テロが頻発するようになり、白い肌のユダヤ市民たちは一目でアラブ人とわかるミズラフィムを警戒するようになったため、彼らの立場はロシア移住者よりさらに悪くなった。『アブダラー』の仲間の若者には絶望して過激派組織に身を投ずる者もいたが、『アブダラー』はイスラエル国民として生きる道を選んだ。彼は「良き市民」たらんとした。その選択が軍隊に入り国を守ることだった。彼の心のよりどころは民族でもなく宗教でもなく国家そのものなのである。

彼自身は『アブダラー』と言うニックネームが好きになれない。『アブダラー』は最もありふれたアラブ人の名前であり、「アブドゥ（僕…しもべ）」と「アラール」を合わせたもの、即ち「アラールの僕」と言う意味がある。『アブダラー』自身にとつてはイスラム色の強すぎるこの名前が嫌だったのである。しかし彼はそれを我慢した。いずれそのようなことを意識せずに済む日が来ると信じていた。

3人のパイロットはそれぞれの思いを抱きつつ夜明けの砂漠と地平線の太陽を凝視していた。しかしいつまでももの思いに耽ける余裕はない。なにしろ彼らは現在サウジアラビアの領空すれすれを飛んでいるのである。サウジアラビア空軍には地上レーダーと早期警戒機AWACSが完備しており、上空を通過する3機を察知している。第4章である。サウジアラビア戦闘機がスクランブル（緊急発進）をかけ、イスラエル戦闘機をインターセプト（迎撃）するかもしれない。だから一時たりとも警戒を怠れない。

## 第4章

ただこの点については基地出発前のミーティングで、サウジアラビアの迎撃の可能性は無い、と上官から告げられていた。政府上層部が空爆計画実施の数日前米国に秘かに計画実行の日時を通告、その後米国とサウジアラビアの間でイスラエル戦闘機の通過を黙認することが合意された、と教えられていた。しかしパイロット達には念のためイラク国境近くにあるサウジアラビアのハファル・アル・バテン空軍基地の近くではこれを大きく迂回し、サマワの南方を飛ぶよう指示が与えられた。イラク領内深くに飛行コースを変更するのである。フセイン政権崩壊後のイラク空軍は弱体化しており攻撃される心配はない。

イラク領内の飛行が安全であるなら、ヨルダン上空を横切りそのままイラク上空を飛び続ければ良いはずであるが、イスラエル―米国間の協議で戦闘機はサウジアラビアとイラクの国境線上空を飛行することが決定された。イラク南部はイランと同じシリア派住民がほとんどであり彼らはイランに対して宗教的な同胞意識を持っている。イスラエルのイラン空爆後、戦闘機が彼らの頭上を通過し、それを米国が黙認したことが判明すれば、それまで米軍に比較的協力的であったシリア派住民の反米感情に火がつくことは明らかであった。だから戦闘機の飛行コースはサウジアラビア・イラクの国境線上と決められたのである。

幸いハファル・アル・バテン基地から戦闘機がスクランブル発進する様子はなく、

そのことは米国の軍事偵察衛星でも確認された。3人のパイロットは少し安堵して一路目標のナタンズにむけて高々度飛行を続けた。彼らはサウジアラビアが米国の意向に背くはずはないと信じて疑わなかった。とにかくイスラエルと米国は強い信頼関係で結ばれ、サウジアラビアごときが反抗できるはずはない、と言うのが3人のパイロットだけでなくイスラエル軍部全体の揺るぎのない確信であった。

しかしその頃、ハフアル・アル・バテン基地の内部では慌ただしい動きが起こっていたのである。